

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red

Cross Kyushu International College of

Nursing

概念分析の手法についての検討：  
概念分析の主な手法とその背景

メタデータ	言語: ja 出版者: 日本赤十字九州国際看護大学 公開日: 2013-01-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上村, 朋子, 本田, 多美枝 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15019/00000136">https://doi.org/10.15019/00000136</a>

著作権は本学に帰属する。

# 概念分析の手法についての検討

## －概念分析の主な手法とその背景－

Discussion on Methods of Concept Analysis  
－ methods and its background －

上村朋子、 本田多美枝  
Tomoko Uemura, Tamie Honda

日本赤十字九州国際看護大学  
The Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing

### 要旨

本稿では、「概念分析」の手法について概観し、それぞれの手法が生み出されてきた背景について論じた。「概念分析」は1960年代の看護理論の開発に伴い、その構成ブロックである「概念」を明らかにする必要性から、欧米を中心に探究が進められているものである。

看護の分野で使用されている「概念分析」の手法は、高校生の概念分析スキルの向上を意図して導かれたウィルソンの方法から展開している。その主なものは、システマティックな方法として評価され、先行研究において最も採用されているウォーカーとアーヴァントの方法、また時間や状況による概念の変化に着目したロジャーズの革新的方法、実践現場で概念がどのような意味で使用されているのかを重視したバイブリッド・モデル、さらには、いくつかの概念を多面的に分析する同時的概念分析などである。

「概念分析」は、これまで曖昧に使用されてきた「概念」を明確にすることを通して、看護の現象に迫る方法を提示している。それぞれの手法の活用にあたっては、分析の目的に適した手法を選択して、クリティカルな思考を展開することが重要である。

Key Words : 概念分析、看護理論、理論開発

## 1. はじめに

社会の変化に伴い、看護に対するニーズも多様化・複雑化し、より質の高い看護に関心が集まってきている。看護の質はもはや看護職者だけの問題ではなく、国民的関心事となりつつある。より質の高い看護を目指して、現場にいる看護職者には、自らの経験を言語化し、看護の現象を明確にすること、すなわち「概念化」「理論化」が期待されている。

しかしながら、看護の現場では、未だ「看護現象」や「概念」といった言葉はなじみが薄い。看護が対象とする人間の反応は、身体的・精神的・社会的な現象が統合されたものであり、看護の専門家には対象者の心理的・物理的・化学的・文化的など多側面の反応現象について理解できる知識が求められる。このように幅広い対象領域を持つ看護という現象に迫り、看護に共通する問題やその解決の方法について論じていくときに、共通言語としての「概念」の理解が必要不可欠である。

欧米では、1960年代頃より看護理論の開発に伴い、その構成ブロックである「概念」を開発する必要性が認識されるようになってきた。さらに1980年代以降、概念開発の戦略の1つとして「概念分析」の手法が様々に取り上げられ、看護における主要な概念を探究するようになってきている<sup>1-4)</sup>。

わが国では理論開発そのものが遅れ、「概念」を明確化することの重要性が十分に認識されていない。その理由として、欧米の看護理論に用いられている「概念」を十分に吟味せず受け入れてきた経緯があり、「概念」が曖昧なまま用いられている。それに加えて、「概念分析」の手法も定着していない。

そこで、本研究では看護学領域で用いられている不明瞭な「概念」を明確にし、より洗練されたものとするためのアプローチである「概念分析」の手法について概観し、それぞれの手法が生み出されてきた背景を明らかにする。先行研究での具体的な手法の過程を辿ることによって、それぞれの手法の強みや弱みについて検討することを目的とした。

本稿では、第1報として、主な概念分析の手法とその背景について報告する。

## 2. 研究方法

Cinahl (1982~2002) で “Concept Analysis” をキーワードとして検索すると1277件が抽出された。そのうち、タイトルに “Concept Analysis” を含むもの161件と、医学中央雑誌 (1983~2002) で「概念分析」をキーワードとして検索、抽出された11件を分析対象とした。

さらに、これらの文献の中で用いられている「概念分析」の手法について言及する書籍を分析対象として加えた。

本研究では、まず、基本となる文献および書籍から概念分析の手法を取り出し、その後、検索した172文献での活用、それぞれの手法の強み・弱みについて検討した。最近では、看護診断にも概念分析の手法が利用されているが、本来、概念分析は理論開発の1つの方策として位置づけられており、理論開発には欠かせないものとなっている。そこで、本稿では、理論開発からみた概念分析の意義や理論との関係を明らかにし、今後の理論開発や概念開発の方向性についても考察する。

### 3. 概念分析の手法とその背景

この十数年で看護診断の考え方が普及し、看護における共通言語として機能するようになってきた。しかし、われわれが日常的に経験する看護現象には、こうした看護診断では言い表せないもの、まだ説明のつかないことも少なくない。また、看護診断そのものが翻訳されたものであるから、本来の意味を検討する必要があると思われるが、その意味が十分に理解されないまま使用されている場面も見受けられる。日本では、欧米で開発された看護理論をよく吟味せずに受け入れてきた経緯があり、われわれが経験している看護現象を的確に伝える言葉、概念には無頓着な傾向がある。

しかしながら、日常的な看護ケアの質の向上には、まず、自分たちの経験している看護現象を記述し、説明できることが必要である。現象を意識し、問題を共有するには、意識したことの内容、意味を的確に伝える概念が重要である。意識したことを借り物ではない自分たちの言葉で表すにはどのような方策が必要なのだろうか。

欧米では、看護を説明するための理論が多く輩出されているが、こうした理論が生まれてきた背景とはどのようなものか。まず、欧米における理論開発の背景を見ていく。

#### 1) 看護における理論開発の背景

ナイチンゲールによって確立したといわれる近代看護は、看護実践と医学的实践とを区別し、看護の独自性を明らかにする知識体系を発展させてきた。彼女の著した『看護覚え書』(1860)は、厳密には看護理論と言えないが、環境をはじめ数多くの看護上の問題を提起し、後の理論家たちに多大な影響を与えた。

看護の複雑で多様な現象についての相互に関連した一貫性のある関係性の記述が看護理論(Theory)といわれるものである。これは、基本的に、ある目標を達成するためには看護場をどのように捉えるべきかということを教えてくれるものであり、看護場面で生じる複雑なできごとの関係を系統的に整理するのに役立つ。一般的に、その理論を構成する基本的なブロックが「概念(Concept)」であり、2つ以上の「概念」の関係性を述べたものは「陳述(Statement)」と言われている<sup>5)</sup>。

看護理論は看護を定義することに伴い、1960年代初期から盛んに開発されるように

なった。黎明期の理論家、ペプロー (1951)、オーランド (1961)、ウィーデンバック (1964) 等は、看護師-患者関係に中心をおいた概念の定義に焦点を当てた。続く70年代には、ロジャーズ (1970)、キング (1971)、ジョンソン (1980) が現れ、看護実践の目標と構造の視点を提供する、より広範な概念に焦点を移した。これらの理論のほとんどは、他の学問領域での理論を参考にしており、80年代になると、70年代初期に看護の概念枠組みを開発したオレム、キング、ロイ、ロジャーズなど多くの理論家はその理論を発展させ、修正を図った。さらには、ワトソン (1985)、レイニンガー (1985) のように看護の現象そのものから理論を構築しようとする動きも見られるようになった。

こうした看護理論開発には、1960年代、70年代の論理実証主義から1970年代後半、成果よりもそのプロセスを重視する方向へ、さらに1980年代には要素還元主義からホーリズムへとパラダイム・シフトした影響が考えられる。80年代に多くの看護理論家が理論の修正、拡大を図ったのは、その哲学的基盤である論理実証主義に疑問を持ち始め、厳密さを求めるあまり意義あることを犠牲にしすぎる量的研究方法に限界を感じたことが契機となっている<sup>6)</sup>。これまで看護の領域では、ものごとの捉え方や考え方の基盤となる看護哲学については、あまり関心を払ってこなかった。しかし、どのような視点に立つのかによって理論の構成やその研究アプローチは大きく異なってくるので、その哲学的基盤を明らかにすることは重要である。

表1は、看護における大理論を年代順に整理したものである。これら大理論の焦点となっているテーマに着目すると、ニード、システム、相互作用という3つの概念に関心の集まっていることがわかる。1950年代半ばから60年代半ばにかけては「ニード」が特に強調されている。心理学のマレー、マズローが提示した理論に基づき、ヘンダーソン、アブデラ、オーランド、ウィーデンバック、オレムが看護理論を展開した。これに対して、「システム」はチン、パーソンズ、ベルタランフィの著作が出版された時期とほぼ一致して60年代末から急速に支持され始め、現在でもなお着目されている。ジョンソン、ロジャーズ、キング、ベティ・ニューマン、ロイが彼らの著作をもとに看護理論の開発を進めていった。「相互作用」は各年代で取り上げられている。相互作用的アプローチの基盤となる理論は、基本的にはサリヴァンやカール・ロジャーズらによる心理学理論である。デューイなどの学習理論もまた、患者教育の相互作用的アプローチの基盤となっている。これらの理論を受け、ペプロー、レヴィン、トラベルビー、ワトソンは看護師と病気や切実なニードを持つ個人との関係を中心的な課題として理論を展開した<sup>7)</sup>。

しかしながら、看護理論家の多く、例えば、ワトソン (相互作用指向理論) も個人のニードに着目していることやオーランド (ニード指向理論) やキング (システム指

向理論)が看護を相互作用的なものとして記述していることからわかるように、それぞれの理論には複数の概念が含まれている。

また、理論家の看護に対する考え方によって、同じ「ニード」という概念を取り扱っても、その焦点の当て方には違いがある。例えば、ヘンダーソンは患者の14のニードに焦点を当て、アブデラは患者のニードを満たすために確認しなければならない21の看護問題に焦点を当てた。そのようにして挙げられたニードの概念は異なっている。

表1 看護における代表的な理論

著者	年代	出版物および理論の焦点
ペブロー, H	1952	Interpersonal Relations in Nursing 看護における対人関係
オーランド, I	1961	The Dynamic Nurse-Patient Relationship 表出されたニードの充足
ウィーデンバック, E	1964	Clinical Nursing: A Helping Art 臨床看護—援助の技術
ヘンダーソン, V	1966	The Nature of Nursing 人間のニード
レヴィン, M	1967	The Four Conservation Principles of Nursing 看護における4つの保存原理
ロジャーズ, M	1970	An Introduction to the Theoretical Basis of Nursing 統一体としての人間と環境
キング, I	1971	Toward a Theory of Nursing: General Concepts of Human Behavior 目標の達成
オレム, D	1971	Nursing: Concepts of Practice セルフケアの欠如
トラベルビー, J	1971	Interpersonal Aspects of Nursing 看護の対人関係の側面
ニューマン, B	1971	The Betty Neuman health-Care Systems Model ベティ・ニューマンのヘルスケアシステムモデル
ロイ, C	1976	Introduction to Nursing: An Adaptation Model 適応
ジョンソン, D	1980	The Behavioral System Model for Nursing 行動システム
レイニンガー, M	1985	Transcultural Care Diversity and Universality 文化的ケアの多様性と普遍性
ワトソン, J	1985	Nursing: Human Science and Human Care ケアリングの哲学と科学
ニューマン, M	1986	Health as Expanding Consciousness 拡張する意識としての健康

(Walker & Avant: Strategies for Theory Construction in Nursing, Third Ed., Appleton & Lange, 1995, p.9  
一部改変)

しかも、理論家はそれぞれ異なる用語を用いて概念を表現しているため、概念によって想起されるイメージには相異がある。

看護は、これまで、その対象である人間に関するありとあらゆる領域の学問から理論や概念を取り込む形で理論を発展させてきた。しかしながら、取り込んだ理論や概念が、看護という現象を十分に描き出すことができているかは、実践を通じてのみ検証される。

理論は、実践あるいは研究を通じて検証されることによって、曖昧な概念が修正され、新たな概念が明確になる。概念が明確になることによって理論が精緻化し、大理論から実践レベルの理論が派生していくという循環の中にある。このような看護科学の発展段階を示したものが図1である。

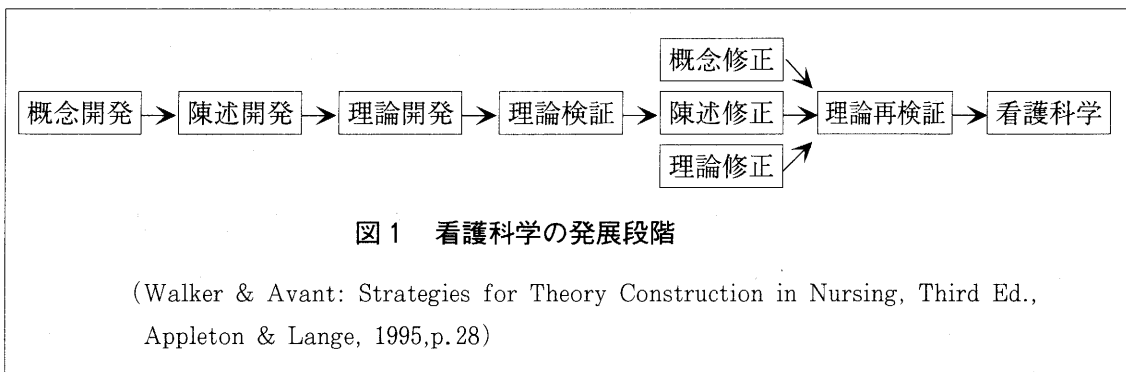


図1 看護科学の発展段階

(Walker & Avant: Strategies for Theory Construction in Nursing, Third Ed.,  
Appleton & Lange, 1995, p.28)

理論には概念も陳述も含まれるので、理論開発はこの2つの要素のレベルで始まり、研究や実践を通じて検証されることが必要である。どんな理論開発も、まさに、その中に含まれる概念の明確化と解明にその基礎がある。

## 2) 理論における概念の意義と概念開発の方策

理論開発とともにその重要性が認識されてきた「概念」は、理論の基本的な構成ブロック、つまり構成要素である。概念という語もまた一つの概念であるから、概念という語についても定義をし、その特徴を明らかにしなければならない。概念は現象についての知的イメージである<sup>8-10)</sup>。つまり、概念とは対象、特性、事象を記述し、知覚した内容を意味づけるものである。概念には具体的なものから抽象的なものまで含まれる。イメージが異なり、曖昧であるほど、その概念は抽象的である。概念は言語手段によって表現されるが、言語そのものは概念ではなく、概念を伝達する唯一の手段である。

では、どのような状況で概念開発が必要とされるだろうか。まず、考えられるのは、関心領域で、利用できる概念がほとんど、あるいは全くない。さらに、関心領域で概念はすでに確認されているが、不明確あるいは時代遅れで役に立たない。関心のある

トピックについて多くの理論的文献、研究はあるが、文献と研究が適合しない、理論と研究あるいは実践の間に明確なつながりがない状況など、主として3つの状況を挙げることができる<sup>11)</sup>。

このような状況の中でどのようにして概念を探したり、修正することができるだろうか。概念開発の方策としては、概念探究、概念の明確化、概念分析の3つがあるといわれている<sup>12)</sup>。

概念探究 (concept exploration) は、概念が依然あいまいで、看護領域との関係についても明確でない場合に行われる。したがって、未知の概念であること、あるいは当然のことと考えられている身近な概念で、その意義に気づいていないということが前提となる。他の学問領域から看護へ無批判に採用されてきた概念も含まれる。

概念の明確化 (concept clarification) は、合意を得ずに用いられてきた概念を修正するために活用される。例えば、定義の修正、概念のさまざまな要素間の関係の考察、新たな関係性の発見など。これには統合と排除のプロセスがある。境界を明確にする、文脈を定義する、概念をとりまく下位概念 (subconcepts) を吟味することが大切であり、そのプロセスには、比較、対照、詳述、区別、事例提示、前提と哲学的基盤の明確化、現象の引き金となる事象の明確化、看護の視点からの問題提起が含まれる。概念の明確化が、次に説明する概念分析と異なっているのは、反対事例、命題、仮説、先例、結果の展開を必要としないという点である。

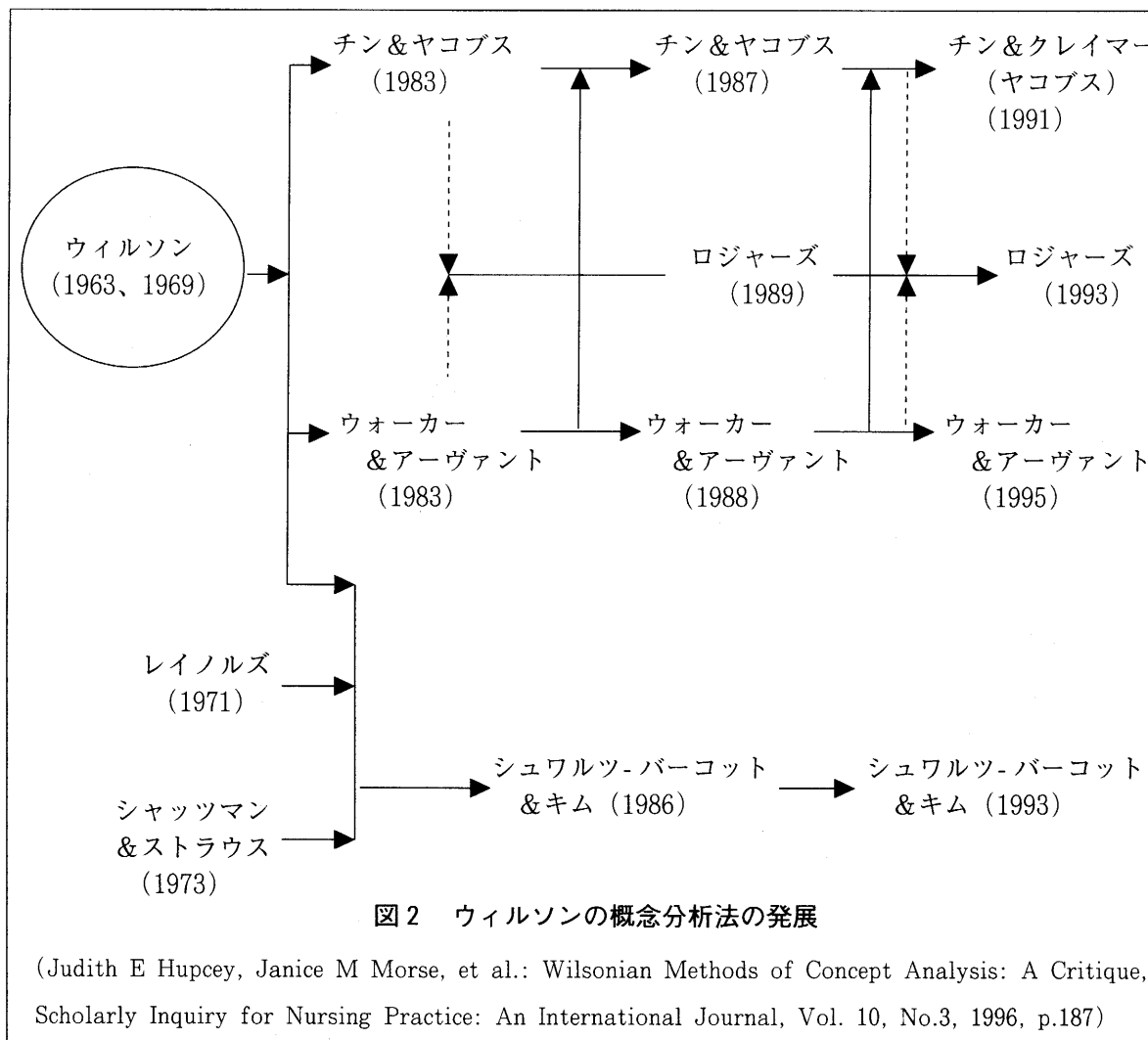
概念分析 (concept analysis) は、その概念が文献などで既に知られていること、定義、明確化が行われていること、しかし次のレベルの開発に持っていくためにさらなる分析を必要としている場合に用いられる。分析は構成要素に分解して要素間のつながりを明確にし、それを多くの明確な基準に照らして吟味するプロセスである。このプロセスには語義に関する分析 (semantic analysis)、論理的に派生するものの分析 (analysis of logical derivation)、文脈分析 (context analysis) が含まれる。概念分析は理論検証に役立つばかりでなく、測定用具開発にも必要である<sup>13-15)</sup>。

以上のように、概念開発には、概念探究、概念の明確化、概念分析の3つがある。我々が日常経験している看護現象は複雑であり、対象の特性、状況の特性を述べるだけでも多くの概念が必要とされる。1つの看護現象の全体を述べるには、その概念間の関係を述べ、その関係を述べた陳述についてもどのような関係性があるのかを明確にすることが求められる。概念の意味が異なれば、当然その関係も異なってくるので、基礎となる概念の正確さは重要である。したがって、看護の現象を的確に説明することのできる理論の開発には、厳密さという点で概念分析が必要である。



### 3) 看護における概念分析法の発展

看護における概念分析の手法は、ウィルソンが提示した指針 Wilson method をウォーカーとアーヴァント (1983、1988、1995)、チンとクレイマー (ヤコブス) (1983、1987、1991)、シュワルツ-バーコットとキム (1986、1993)、ロジャーズ (1989、1993) が看護の領域に応用することで発展した (図2 参照)。



ウィルソンは研究の方法としてではなく、高校生が概念分析の認知的、記述的スキルを獲得することを意図し、授業の演習で用いるためにこのガイドラインを開発したと言われている<sup>16)</sup>。看護の領域で、このウィルソンの手法が支持されたのは、概念の本質に迫る方策が具体的、段階的に示されていたからであると考えられる。しかし、分析の各段階を忠実に辿れば概念の本質を見極められるというものではない。各段階でのクリティカルな思考こそが重要である。

#### 4) 概念分析の手法と特性

ウィルソン由来の概念分析の主な手法を整理したものが表2である。

ウォーカーとアーヴァントは、概念・陳述・理論という理論の要素と、分析・統合・派生というアプローチの組み合わせから9つの理論構築の方策を示した。概念分析は

表2 ウィルソンの概念分析法から派生した主な手法の比較

分析の段階	ウィルソン (1963/1969)	ウォーカー&アーヴァント (1995)
概念の選択		1. 概念を選択する
分析の目的・目標の決定		2. 分析の目的あるいは目標を決定
概念の領域/境界の詳述	1. 概念についての疑問を明確にする 2. 疑問に対する可能な限りの回答を考え、質問の本質的な要素を明確にする 技法を活用して：事例を構成する、社会的な文脈を探究する、懸念されることを調べる、実践的意義を検証する、概念を最もよく表す意味を洗い出す	3. 可能な限り、概念のあらゆる使用について洗い出す
内的構成要素と属性の定義	相互のつながりを導き出す	4. 定義的属性を決定する
プロトタイプ(典型例)の開発	3. モデルとなる事例を提示する 4. 反対の事例を提示する 5. 関連する事例を提示する 6. 境界にある事例を提示する 7. 創作した事例を提示する 疑問を再分析する	5. モデルとなる事例をつくる 6. 境界、関連、反対、創作、間違った事例をつくる
発展的成果の決定	8. 社会的文脈の探究 9. 懸念されることを調べる 10. 実際の意義を定義し、明確化する 概念を最もよく表す意味を洗い出す	7. 先行要件と結果を洗い出す
指標の明確化	疑問と結果を比較する 11. 結果とラベルを記述する用語を慎重に選ぶ	8. 経験的指標を定義する

その方策の一つであり、その目的は概念の特性と属性を明確化することにある。

ウィルソンの手法では概念の特性を反映する事例を明確に記述した後、概念の特性を再分析するが、ウォーカーとアーヴァントの手法では、定義的属性を決定後、それに合う事例を構成し、再分析する段階は提示されていない<sup>17-18)</sup>。しかし、ウォーカー

表2 (つづき)

チン&クレイマー (1991)	ロジャーズ(革新的方法) (1993)	シュワルツ-バーコット&キム(ハイブリッド・モデル) (1993)
1. 概念を選択する	1. 関心のある概念と関連のある表現を明確にする	<理論的な相> 1. 概念を選択する
2. 目標の明確化		
3. データの資源を確認する 現存する定義の検証 文献 人的資源	2. データ収集の適切な範囲を明確にし、選択する 3. 代替となる用語、関連事項、先行するもの、結果など属性に関するデータを収集する 4. 関連する概念を明確にする	2. 文献を検索する
	5. 上記の概念の特性に関するデータを分析する 6. 必要であれば暫定的な比較を行う	3. 意味と測定を扱う 4. 作業的定義を選ぶ
事例をつくる：モデル、反対、関連、境界 4. 文脈と価値を探究する	7. 適切なものがあれば、概念のモデルとなる事例を挙げる	<フィールドワークの相> 1. 段階を設定する 2. 調査立ち入りを交渉する 3. 事例を選択する 4. データを収集し、分析する
	(データ収集に含まれる)	
5. 評価基準を編成する	8. さらなる開発に向けて仮説と暗示されることを洗い出す	<分析的な相> 明確化と精緻化をめざして知見を重みづけし、操作する

(Hupcey, J.E., Morse, J.M. et al.: Wilsonian Methods of Concept Analysis: A Critique, Scholarly Inquiry for Nursing Practice: An International Journal, Vol. 10, No.3, 1996, p.189~191, 一部改変)

とアーヴァントは各段階を行き来することを前提としているので、特に再分析の段階は設定していなくても、概念の特性や属性を繰り返し吟味することは意図していたと考えられる。このような意図を意識し、単純に各ステップを踏んでいくことに終始しなければ、そのプロセスでクリティカルな思考の展開を妨げられることはないであろう。

チンとクレイマーの概念分析の目的や手法は、ウォーカーとアーヴァントのものに類似しているが、この2つの手法の活用を比較すると、看護の領域ではウォーカーとアーヴァントの手法がより多く用いられている。これは、理論の要素とアプローチを組み合わせ、よりシステムティックに理論構築が説明されていることが理由として考えられる。

この2つの手法では、概念はどちらかという静的で普遍的なものとして捉えられていたが、ロジャーズは、概念は開発されるものであり、時間の流れの中で使用され、適用され、再評価され、洗練されると考えた。こうした流れは伝統的なものとは異なるという意味で、革新的な視点と言われる。しかし、ウォーカーとアーヴァント、チンとクレイマーも「概念派生」「概念の意味を生み出す」について述べているので、概念が変化することを認めていなかったのではない。ウォーカーとアーヴァントらが、さまざまな典型例を使って、現時点での概念の範囲や境界を明らかにしようとするのに対し、ロジャーズは時間や状況の変化に伴う概念の変化に着目し、関連する概念と比較・対照することで概念の特性を明らかにしようとする。後者は、必要であればモデルとなる事例だけを提示するというように典型例の提示を重要視していない。ロジャーズの手法は、概念固有の属性よりも代用語や意味の違いに注目して変化する概念全体を捉え、そこに本質を見出そうとする新たなパラダイムを反映している<sup>19)</sup>。

この3つの概念分析の方法によって明らかになった結果は、いずれも実践を通じて検証することが重要であると強調されている。しかし、分析を通じて明らかになった概念の検証やどのような概念の分析に適しているのか、概念をどのように選択するのかについては具体的に提示されておらず、実践とのつながりという点が明確でないことが課題ではないかと考える。

この3つに対し、実践の現場で概念がどのような意味で使用されているのかを明らかにするという目的をその手法に反映しているのが、シュワルツ・バーコットとキムの提示したハイブリッド・モデルである。これは理論的な相、フィールドワークの相、分析的な相と3つの相から成り立っている。理論的な相が終了してからフィールドワークの相へ移るのではなく、同時進行することもある。理論的な相と分析的な相では、ウィルソンやレイノルズの手法が、フィールドワークではシャッツマンとストラウスの指針が活用される。この手法は、実践的理論の開発を目的とする概念分析に用いら

れる<sup>20)</sup>。

これまで述べてきた概念分析の手法は、単一の概念を取り扱うものである。しかし、看護で扱う現象は、多面的でいくつかの概念の相互関係の中で成り立っているため、関係する概念をその関係性も含めて分析しようとする試みも生まれている。Haase, Britt, Coward, Leidy, Penn (1992) が「スピリチュアリティ」の概念を、関係する「希望」「受容」「自己超越」という概念との関連性も含めて分析するために開発した同時的概念分析 (Simultaneous Concept Analysis) という手法である。これは数人のグループで行うところが特徴的であり、個人作業とグループディスカッションを繰り返して分析を進めていく。まず、各個人がそれぞれの概念の先行要件、不可欠な特性、結果を明確にし、定義する。次に、特性、先行要件、結果の類似と相違が定義され、妥当性の基盤 validity matrix を形成する。最後に、グループでレビューし、その結果をもとの概念と比較、対照しながら、特にことば、語義、意味、目標に注意して評価を行う。このプロセスはある共通の合意点に達し、この合意を反映するプロセスモデルが構築されるまで続けられる。複数の複雑な概念に取り組むことで、重要な視点が見失われることもあるため、外部評価を受けて分析の結果を査定する<sup>21)</sup>。

以上、5つの概念分析の手法について見てきた。看護領域でよく用いられているウォーカーとアーヴァントの手法には、各段階が設定されている意図を理解して活用しなければ、クリティカルな思考が十分に展開されないという陥穽のあることがわかった。活用に際しての注意事項や各段階を反復するプロセスを明らかにし、手法を修正する余地も残されている。また、ハイブリッド・モデルや同時的概念分析は、それらの手法を用いた研究がまだ少ないので、その有用性については今後の検討を待つ必要がある。ただ、概念分析に際しては、明らかにしようと思う概念や分析の目的に応じて、それに適した手法の選択が重要であることが示唆される。

ここで、検索した172文献の傾向について、簡単に報告する。172文献で、比較的によく用いられていたのは、ウォーカーとアーヴァント (1983、1988、1995) の手法、ロジャーズ (1989、1993) の革新的手法であった。ハイブリッド・モデル、同時的概念分析を使用したものも数例見られた。

最近の研究では、「自尊感情」「自律性」「エンパワーメント」のような概念の分析が行われている。また、わが国でも大学院レベルの研究では、すでにこうした概念分析の手法を用いた研究が始まっている。最近では、ピア・グループや指導者のスーパーバイズを受けながら、そのプロセスで客観的な評価を受けて研究を進めている。

しかし、全体としては、テーマに概念分析を標榜してはいるものの、そのほとんどが概念の探究、概念の明確化に止まっているように思われる。一つの研究から得られた結果を発展させ、次の開発レベルへと着手した研究は、ほとんど見当たらなかった。

紙面からでは、概念についての本質的な問いを吟味するプロセス、各段階を反復したプロセスが見えにくいため、概念分析の各段階でクリティカルな思考を十分に展開できているのかが評価の難しいところであり、本研究の限界でもあると考えられる。

#### 4. おわりに

今回の研究で、ウィルソンに由来する概念分析の方法にはまだ修正の余地があるが、概念分析に取り組むことで看護領域における主要な概念を明らかにすることができ、看護の視点がより明確になることを理解できた。また、このプロセスを通じて、共通言語としての「概念」の重要性に改めて気づかされた。概念分析に際しては、概念に対する本質的な問いを明らかにし、それに適した手法を選択して、クリティカルな思考を展開していくことが重要である。

わが国でも共通言語としての看護診断の考え方が定着しつつあるが、この看護診断の確立にも概念分析が大きな役割を果たしている。また、最近では看護の成果を標準化しようという動きもあり、そのプロセスにも概念分析が活用されている。しかし、その使用に際しては、安易に受け入れるのではなく、診断名の意味するところを理解した上で、日常の現象を言い表しているかをよく吟味することが必要であると考えられる。

看護は実践の科学であるといわれる。実践の科学であればこそ、日常の看護現象を記述し、そこから概念開発を行っていくことや具体的な実践を導く実践理論の開発が求められる。今後は、実践と理論の統合を図りやすく、多角的な視点から分析を行うことのできるような手法の洗練と開発が課題であると考えられる。

#### 引用文献

- 1) Meleis, A.I.: Theoretical Nursing: Development & Progress, Third Ed. , Lippincott, Philadelphia, 1997, pp.203-276
- 2) Walker, L.O. & Avant, K.C.: Strategies for Theory Construction in Nursing, Third Ed., Appleton & Lange, 1995, pp.1-77
- 3) Chinn, P.L. & Kramer, Theory and Nursing: A Systematic approach, Third Ed. Mosby Year Book, 1991, pp.79-105
- 4) ペギーL.チン、メオーナK.クレイマー／白石聡監訳：看護理論とは何か、医学書院、1997
- 5) 前掲書2)、pp.24-26
- 6) 前掲書4)
- 7) ガートルード トレス／横尾京子・田村やよひ・高田早苗監訳：看護理論と看護過程、医学書院、1992
- 8) 前掲書1)

- 9) 前掲書 2)
- 10) 前掲書 3)
- 11) 前掲書 2)
- 12) 前掲書 1)
- 13) 前掲書 1)
- 14) 前掲書 2)
- 15) 前掲書 3)
- 16) Hupcey, J.E., Morse, J.M., Lenz, E.R. et al.: Wilsonian Methods of Concept Analysis: A Critique, *Scholarly Inquiry for Nursing Practice: An International Journal*, Vol. 10, No.3, 1996, p.194
- 17) 前掲書 16) pp.185-210
- 18) Morse, J.M., Hupcey, J.E., Lenz, E.R.: Concept Analysis in Nursing Research: A Critical Appraisal, *Scholarly Inquiry for Nursing Practice: An International Journal*, Vol.10, No.3, 1996, pp.253-277
- 19) Rodgers, B.L.: Concepts analysis and the development of nursing knowledge: the evolutionary cycle, *Journal of Advanced Nursing*, 1989, 14, pp.330-335
- 20) Schwartz-Barcott, D.& Kim, H.S.: A Hybrid Model for Concept Development / Chinn, P. L. (Ed.) *Nursing Research Methodology*, Rockvill, MD; Aspen, 1986, pp.91-101
- 21) Haase, J.E., Britt, T., Coward, D.D. et al.: Simultaneous concept analysis of spiritual perspective, hope, acceptance, and self-transcendence, *Image: Journal of Nursing Scholarship*, 24(2), pp.141-147